

平成 26 年 5 月 7 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520060

研究課題名(和文)「路傍の地蔵」の宗教史的考察

研究課題名(英文) Religion historical consideration of Jizo on a roadside

研究代表者

清水 邦彦 (Shimizu, Kunihiko)

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号：50313630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：路傍の地蔵が道祖神との習合から立てられるようになったという通説の見直しを行った。地蔵盆で有名な京都に関しては、六地蔵参りの模倣として立てられたことを明らかにした。なお、地蔵盆には死者供養的面があり、これは道祖神信仰には見られない面である。京都に関しては、江戸時代では町境に立てられることも多かった、現在ではそうではない。

東京23区域では死者供養のために立てられたことが多いものを明らかにした。また、初期のものは、庚申信仰との習合が見られた。石川県金沢市では、江戸初期のものは、造立理由不明だが、後には死者供養を目的とするものが幾つか見られた。

研究成果の概要(英文)：I look over again the accepted theory that images of Jizo on the roadside was made from combination with Dosojin. I considered the following three areas mainly. In Kyoto the images of Jizo on the roadside is famous for a-Jizo-bon. They were stoo as Kyoto-6-Jizo imitation. Jizo-bon aims at dead mass for the dead. In Tokyo's 23 Wards, they usually was stood for dead mass for the dead. In it I found out combination them and Coshin. In Kanazawa-Shi, the reason why they were made is not known in the early Edo period. In the late Edo period, some of them were made for the purpose of dead mass for the dead.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：地蔵信仰 道祖神 死者供養

### 1. 研究開始当初の背景

日本の路傍に於いて、地蔵像が祀られることは珍しいことではない。この理由について、通説では道祖神との習合が云われてきた。しかしながら、中世の地蔵説話に於いて、道祖神との習合を説くものはない。(路傍に地蔵像が立てられるようになるのは、江戸時代以降。)果たして、路傍に地蔵像を祀るようになったのは、道祖神との習合なのだろうか？

### 2. 研究の目的

日本に於いて、地蔵像が路傍に祀られるようになった、理由を事例に即して調査し、道祖神との習合説の是非を論ずる。

### 3. 研究の方法

(1)各地の、路傍の地蔵像を調べ、特に造立目的を調べる。具体的には銘文調査である。銘文は改刻の可能性もあるが、路傍の地蔵像に改刻しても、政治的意味もないので、改刻の跡がなければ信用することとした。また、現地説明版も確認する。現地説明版は、史実ではなく、伝承かもしれないが、その点に留意しつつ活用した。無論、周辺文献も可能か限り活用する。

(2)これまで、中世文献は悉皆調査をしてきたが、江戸時代の説話集に関しては、不十分であった。ゆえに、江戸時代の説話集に目を通し、道祖神との習合が説かれていないか、路傍の地蔵像造立の理由が説かれていないか、を確認する。

### 4. 研究成果

#### (1)現地調査

日本全国全てを現地調査する訳にはいかないで、以下の6地域を中心に調査を行った。

#### 京都(旧・平安京域)

京都の、路傍の地蔵像に対しては、8月下旬に地蔵盆が行われる。文献を見る限り、路傍に地蔵像が祀られる理由として、地蔵盆が挙げられる。京都の、路傍の地蔵像は、もともと江戸時代に立てられたが、明治の廃仏毀釈で一旦破棄される。明治中旬に再び路傍に祀られるようになるが、その際の名目として、地蔵盆が挙げられる。そこで、地蔵盆の調査を行った。管見の及んだ範囲ではあるが、京都の地蔵盆は同時期に行われる、京の六地藏めぐりと類似している。特に留意すべきは、京の六地藏めぐり対象の各地蔵像は、地域の地蔵盆の対象でもあることである。寺で行われる地蔵盆と路傍で行われる地蔵盆とは大差はない。京の六地藏めぐりと、京都各町の地蔵盆との前後関係は、文献では定かではないが、江戸時代に於いて、六地藏めぐり(江戸時代の名称は六地藏参り)と各町の地蔵盆(江戸時代の名称は地蔵祭・地蔵会)とは一体的行事として、地蔵祭と呼ばれていた。京の六地藏めぐりは、現在、家内安全と共に、新仏供養を目的とする。江戸時代に於いても

死者供養を一目的にしたと考えられる。現在、京都各町の地蔵盆には、死者供養の面は希薄だが、時に賽の河原地蔵和讃が唱えられることもある。ここで確認すべきは、道祖神信仰に死者供養的面はないことである。とすれば、京都の路傍に祀られる地蔵像は、道祖神との習合ではなく、六地藏めぐりの模倣として立てられるようになったと云える。

このことを別の角度から考える。現在、京都の路傍の地蔵像は、必ずしも町境に立てられる訳ではない。(この場合、「町境」は、物理的な意である。本研究では、地蔵が祀られているから、境界として認識される、という解釈は取らない。)また、地蔵盆の際には、いつも祀られている場所から移されることがある。仮に、路傍の地蔵像が境界を守るのであれば、地蔵盆の期間中の町の安全が心配なのだが、そんな心意は見られない。

江戸時代に於いては、町境に祀られることが今よりは一般的だった(この点は京の六地藏が、京の入口に祀られることの模倣)。但し、町年寄りの家に祀られることもあった。前述の如く、京の路傍の地蔵像は、明治の廃仏毀釈で一旦破棄され、明治中旬に復活する訳だが、その際、町境に祀られることが稀になった。この変化は、土地の所有といった問題も絡むのだが、路傍の地蔵像が境界を守ると信じられていたのであれば、江戸時代同様、町境に祀られたはずである。そうではないということは、路傍の地蔵像は境界を守るものでは無かったのである。とすれば、京都の路傍の地蔵像は、道祖神と習合の結果、立てられるようになったのではない。六地藏めぐりの模倣として立てられるようになったが、境界を守るといった心意は希薄であったゆえ、現在は、町境に立てられることは稀になった。

#### 奈良市市街地

奈良市市街地を調査する理由は、他地域と異なり、地蔵盆が7月23・24日に行われるからである。或いは地蔵盆の心意が異なるかとも思い、調査を行った。

結論から云うと、地蔵盆自体は、他地域と異ならない。奈良でも地蔵盆は、死者供養と町の安全を目的とする(但し、町によって、そのウエイトが異なる)。日程については、旧暦時代でも六月に行われており、それが移行したに過ぎない。(無論、他地域では、旧暦に於いては七月であったので、この相違は気になるところであるが、本研究では、この相違に関し、研究の糸口すら見付けられなかった。)

地蔵像が祀られる場所であるが、今回調べた範囲では、町境に祀られる地蔵像は見当たらなかった。地蔵盆に死者供養面があることを踏まえると、奈良に於いても道祖神との習合ゆえに路傍に地蔵像が立てられたとは云えない。

兵庫県豊岡市竹野町

竹野町を取り上げた理由は、竹野の地蔵盆は京都と異なり、先祖供養を目的としている、という説があったためである。このことに対する結論を先に述べれば、先祖供養ではなく、死者供養の面があるに過ぎず、そうした意味に於いて、他地域と大差はない。先行研究で先祖供養面があったとしたのは、供物が盆供と同じであることであった。これに対し、今回調査したところ、竹野町須谷では、地蔵盆に際し、墓には詣らない。竹野町竹野では、墓に詣るのだが、これは地蔵像が祀られているのが共同墓地の門であるため、墓に詣るのは言わば「ついで」に過ぎない。確かに地蔵盆の供物は盆供と同じだが、これは両者とも死者供養であるためである。

竹野町の、路傍の地蔵像はどこに祀られるのか？ 須谷に於いては、地区の境界である。但し、ステ墓の入口等と合わせて、地区の境界6箇所祀られている。須谷に於いては、京の六地藏の模倣として、地区の境界6箇所に祀られるのである。これ以外の地区では、共同墓地の門や井戸等、境界に祀られることがある。但し、地蔵盆の目的が死者供養だとすれば、道祖神との習合とは云えない。他の地区に於いても、京の六地藏の模倣として、路傍に地蔵像が祀られるようになったのである。

#### 東京 23 区域

以上の地域と事情を異とするのが、東京 23 区域である。東京 23 区域では、地蔵盆が行われるのが稀である。仮に現在、地蔵盆が行われていたとしても、近年になって行われるようになった可能性もある（＝路傍に地蔵像が祀られた後に、地蔵盆が行われるようになった可能性）。

というのも、江戸時代初期（～1699 年以前）に立てられた地蔵像（全 46 体）で、現在、地蔵盆が行われているものが見当たらなかったためである。そこで、銘文から江戸時代初期に立てられた、路傍の地蔵像の分析を行う。

結論から云うと、造立目的が分かるものに関しては、死者供養を目的としたものが多い。例えば、1665 年造・在文京区大塚 4-49・大塚公園（もとは大塚 5-9）には「庚申供養・・・二世安楽」とある。また、1670 年・在北区豊島 4-16・下道地蔵堂（近在の地蔵像を集めた）には、「供養庚申二世悉成就」とある。1976 年造・在杉並区高円寺南 5-32-17 にある「蓮経童子・・・妙善童女」も死者供養の意と解釈すべきであろう。

これに対して、当該地域で 1699 年以前に造立された、路傍の地蔵像には、厄神退散といった、道祖神の職能を持つものは見当たらなかった（1700 年以降であれば、幾つか存する）。道標の職能を持つもの（＝「右」と刻まれているもの）も見当たらなかった（1700 年以降、少しずつ存するようになる）。とすれば、道祖神との習合によって、路傍に

地蔵像が祀られるようになったとは云えない。

ちなみに、1699 年以前造立のもので、村境にあったとされるものは、全 46 体のうち、2 体に過ぎない。前述の、1665 年造・在文京区大塚公園の地蔵像は、元は大塚 5-9 にあったとされ、だとすると、小石川村と巣鴨村との境となる。1676 年造・在世田谷区桜丘 2-29-1 は、世田谷区と経堂在家村との境に当たる。これらを例外として切り捨てる訳ではないが、やはり数的には少ない。その他、街道沿いに祀られたものも数例見られる。しかしながら、本研究の説の通り、路傍の地蔵像が死者供養を目的として立てられたとすれば、境界的場所に立てられたとしても当然のことである。幾つかの地蔵像が境界に立てられたとしても、これだけを以て、道祖神との習合とは云えない。

さらに云うと、先に挙げたように庚申との習合が見られるものが幾つか存する。北区・下道地蔵堂には、先に挙げた以外に、1675 年造の地蔵には、「奉供養庚申二世」とある。1664 年造・在足立区加賀 2-6（もとは加賀の阿弥陀堂）には、「庚講」とあり、庚申講による造立の可能性が高い。1677 年・在板橋区大谷口 2-13 には「願主 大野清左衛門 庚申講中十二人」とある。1680 年造・在練馬区小竹町 1-18 には「奉造立庚申供養二世安楽所 志野八兵衛」とある。但し、同所には、他に庚申塔などがあり、路傍というよりは志野家墓地といった方が良いのかもしれない（現在、時に花が供えられるが、盆の季節に塔婆を立てられるといったことはない）。とすると、当該地域で、路傍に地蔵像が立てられた原因として、庚申信仰との習合が想定される。さらに遡ると、庚申板碑との関係も想定されそうだが、この点は今後の課題としたい。

#### 石川県金沢市

金沢市は浄土真宗の強い地域であるが、地蔵盆も行われる。金沢市の地蔵盆（もしくは地蔵祭）は死者供養を目的とするものが多い。以下、江戸時代（以前）に立てられた、路傍の地蔵像を分析する（全 35 体）。

留意すべきものとしては、寛文年間（1661～72）に立てられたという伝承を持つ、在金石北 1-18-36・延命地蔵尊である。これには天然痘退治の伝承が伝わる。現在、同所は金石北と桂町との境界にあたり、江戸時代に於いても境界であった可能性が高い。但し、隣接して納骨堂が存する。地蔵祭りが 9 月に行われ、僧による読経が行われ、1964 年以前は、8 月のお盆にも読経が行われていた。とすると、仏教による死者供養的職能を担う地蔵像であると判断できよう。天然痘退治の伝承及び境界という場所だけを以て、道祖神との習合とは云えない。

1719 年造・在十一屋 11-2・祇陀寺のガッパ地蔵には、「従是南大乘寺道」とあり、も

とは大乘寺道にあったとされる。とすれば、道標の職能を担っていたのであるが、これだけを以てして、道祖神との習合とは云えない。

同様のことは、寛政年間(1789~1801)に医王山道に立てられた7体の地蔵像にも云える。特にキゴ山バス停向かいの地蔵像には「医王山 越」とあり、道標であったことは明確である。しかしながら、これ以外に道祖神的職能は見られず、道標の職能を以て、道祖神との習合とは云えない。

1703~08 頃造・在堀川町 29-2・大円寺の六地蔵は、もとは処刑場への道沿いにあったとされる。8月26日に地蔵祭が行われ、焼香や僧による読経も行われるもとの場所を考慮すると、当該の地蔵像は死者供養の職能を担っていると考えられる。

天保の飢饉による非業の死者供養のために造立された地蔵として、1834年造・在高池町、1837年像・在笠舞 2-21、1837年造・在上中町新坂登り口、の3体が挙げられる。

以上の考察をまとめると、金沢市に於いても死者供養の職能が強く、路傍に地蔵像が祀られた原因に、道祖神の習合を想定するには無理がある。

なお、悉皆調査には及ばなかったが、富山県富山市でも、非業の死者を供養するために、路傍に地蔵像が祀られた事例が幾つか見られた。

以上の6地域の現地調査を踏まえて考察すると、路傍の地蔵像は時に境界神的性格を持つが、道祖神との習合により、祀られ始めたという訳ではない。

## (2)文献 - 主に説話集

### 道祖神との関係

本研究に取りかかった理由の一つに、中世文献に道祖神との習合を説くものがなかったことが挙げられる。では、路傍に地蔵像に祀られるようになった、江戸時代ではどうか？ 本研究では、多数出版された地蔵説話集の分析を行った。今回、管見に及んだのは以下の通りである。

- 『延命地蔵菩薩経和談鈔』1683年刊
- 『三国因縁地蔵菩薩霊験記』1684年刊
- 『地蔵菩薩利生記』1687年刊
- 『地蔵菩薩利益集』1691年刊
- 『礪石集』1692年刊
- 『延命地蔵菩薩直談鈔』1697年刊
- 『地蔵菩薩応験新記』1704年刊
- 『本朝諸仏霊応記』1718年刊
- 『続礪石集』1727年刊
- 『諸仏感応見好記』1726年刊
- 『一万体印造地蔵尊感応記』1821年刊

結論から云うと、江戸時代の地蔵説話集でも、道祖神との習合を説く記述は無かった。道祖神の名は、『延命地蔵菩薩直談鈔』第8巻第49話にあるが、地蔵との関係は説かれていない(勉誠社版 p.620)。

ここから確認すべきは、路傍に地蔵像が祀

られるようになった時期でも、道祖神との習合が、説話集に於いても説かれなかったことである。

路傍に地蔵像が祀られるようになった訳

では、なぜ、路傍に地蔵像が祀られるようになったのか、という問いに対する説話を考察したい。有名な話としては、『延命地蔵菩薩経直談鈔』第3巻第45話がある。

「問フ洛中洛外横堅町小路門ノ辺ニ石地蔵ノ像甚タ多シ。是レ誰人ノ建立ゾヤ。答フ古来ノ伝説ニ源尊氏平生地蔵帰依ニシテ画木像ノ地蔵造立シテ諸寺諸人ニ施与シテ地蔵ヲ数百体彫刻シ玉イ洛中洛外ノ町ニ安置シテ往来ノ男女ヲ結縁センガ為メナリトイヘリ。又尊氏公鎌倉ニ御在住セシ時モ画木石像ノ地蔵ヲ年年ニ数百体造立シ玉ヒテ諸寺諸人ニ施シ石像ヲバ多ク路辺ニ安置シ玉フトナン。サリナカラ京鎌倉路辺ノ中ニモ諸師或ハ道俗共ニ六親眷属等ノ為彫造シタルモ有ルベシトイヘトモ今ハ多分ノ義ヲ判スルモノナリ<尊氏鎌倉ニ於テ画木石ノ地蔵ノ像造立ノ説ハ鎌倉志処処ニ見エタリ>総シテ地蔵菩薩ハ六道ノ能化ナレバ諸国所所ニ至ルマデ石地蔵ヲ路辺ニ安置セリ。此即往来ノ男女ヲシテ結縁ナラシメン為メナリ」(勉誠社版 pp.279~280・句点を補う。<>内は割註)

一般には前半の、足利尊氏起源説が注目される。尊氏が地蔵信仰を有していたことは間違いないが、尊氏に関する一次史料では、路傍に地蔵像を祀ったことは確認できない。むしろ、着目すべきは、後半の、「総シテ地蔵菩薩ハ六道ノ能化ナレバ諸国所所ニ至ルマデ石地蔵ヲ路辺ニ安置セリ」であろう。同書の編者は、地蔵は六道能化であるために、路傍に祀られたと考えていたのである。「六道能化」であれば、当然、死者供養が含まれる。また、「此即往来ノ男女ヲシテ結縁ナラシメン為メナリ」にも留意すべきである。これに従えば、路傍の地蔵像は、仏道への結縁を目的に祀られるようになった訳であり、道祖神との習合を原因すべきではない。

### 地蔵の職能

では、江戸時代の地蔵説話集に於いて、地蔵はどのような職能を担っていたのであろうか？ 渡浩一は、説話集を統計分析した結果、中世に比べると、死者供養等死に関する話の割合が減少している、としている(全く無くなったという訳ではない)。これは是認すべき見解である。

しかしながら、江戸時代が檀家制であったことを考慮すると、この数値を以て、地蔵の死者供養の職能が希薄になったとするのは早計である。檀家制は、家が寺の檀那となることを義務付けた制度であるが、現世利益のために他の寺を詣でることを禁止した訳ではない。あすると、ある程度、檀家が固定化された時代に於いて、寺が収入を増やしたけ

れば、現世利益を強調する必要がある。江戸時代の地蔵説話集に収められる、寺で祀られる地蔵像の霊験は、この目的で作り出されたものも含まれると想定される。一方、寺の檀家の義務の一つに、その寺のやり方で葬式・法事を行わなければならない、というものがある。とすれば、地蔵の死者供養の職能に関し、新たな霊験が生まれる余地はかなり狭まってくる。江戸時代の地蔵説話集に於いて、死に関する話の割合が減少した事に関し、こうした事情も考慮する必要がある。

江戸時代は、賽の河原地蔵和讃が普及した時代でもある。前述の通り、非業の死を原因として地蔵像が祀られることが幾つかあった。檀家制の江戸時代に於いて、通常の死は檀那寺で供養され、そのため、地蔵の職能は、非業の死者への供養にシフトしていったと云える。であれば、江戸時代、地蔵は、死者供養のために祀られるようになったという本研究の結論は、説話集から見た地蔵の職能と矛盾するものではない。

#### まとめ

本研究では、路傍に地蔵像が祀られる原因に道祖神との習合を挙げる通説の見直しを行った。結論としては、地蔵が路傍に祀られる目的は死者供養であり、その点から見ると、道祖神との習合ではない。路傍の地蔵像は、時に疫病退散の職能を担うが、これは死者供養の延長に位置付けられる職能である。

無論、単なる路傍ではなく、村境という境界に祀られることもある。そういった意味に於いては、路傍の地蔵は「境界神」かもしれないが、道祖神と習合したと安易に云うのは避けるべきというのが本研究の結論である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

清水邦彦、地蔵説話の継承と発展、倫理学、査読無、30号、2014、印刷中

清水邦彦、奈良県奈良市中心市街地の地蔵盆、西郊民俗、査読無、224号、2013、28-32

清水邦彦、兵庫県豊岡市竹野町の地蔵盆、比較民俗研究、査読無、27号、2012、86-107  
<http://hdl.handle.net/2241/120158>

清水邦彦、京都地蔵盆の宗教史的研究、比較民俗研究、査読無、25号、2011、74-90  
<http://hdl.handle.net/2241/115360>

[学会発表](計 5 件)

清水邦彦、「地蔵の化身」観の変遷、日本思想史学会、2013年10月20日、東北大学(宮城)

清水邦彦、地蔵説話の継承と変遷、説話文学学会、2013年6月30日、南山大学(愛知)

清水邦彦、地蔵盆と両墓制、日本宗教学会、日本宗教学会、2012年9月8日、皇學館

大学(三重)

清水邦彦、東京都二十三区域西北部の「路傍の地蔵」、日本宗教学会、2011年9月4日、関西学院大学(兵庫)

清水邦彦、路傍の地蔵像の歴史的考察、日本宗教学会、2010年9月4日、東洋大学(東京)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 邦彦 (SHIMIZU Kunihiko)

金沢大学・人間科学系准教授

研究者番号：50313630